

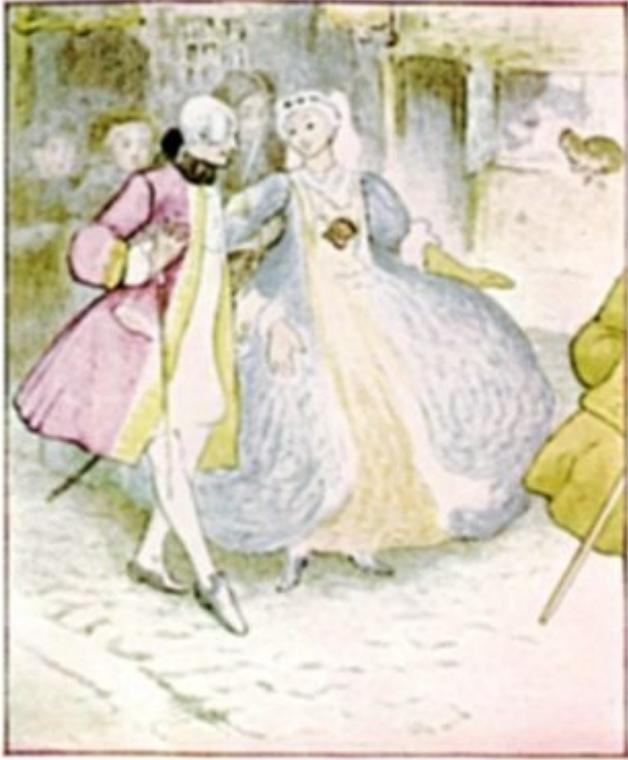
グロスターの仕立屋



ビアトリクス・ポター さく・え

たちばな こうじ やく

「姿見を購おう、仕立屋を20かその倍も請じ入れるとしよう」 (リチャード三世)



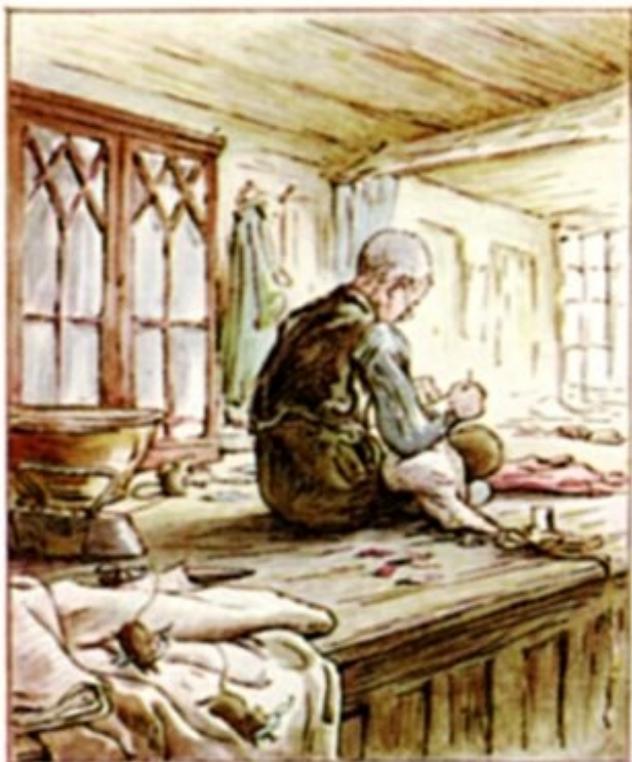
かわいいフリーダへ

おとぎばなしが大好きなあなたが、病気で寝込んでしまったときいて、このお話をつくりました

すべてあなたのために — いままで誰も読んだことのない新しいお話を。

このお話に出てくる不思議な出来事は — 私がグロスターシャー州で聞いたことで、本当のことなんです — 少なくとも、仕立屋や、チョッキや、「糸がもうない！」というところはね。

1901年のクリスマスに



これは長剣や、正装用のかつらや、襟に花をあしらった丈の長いコートフリルの時代――殿方がひだ飾りだの、金糸で縫い取られたうね織りパデュソイやこはく織りタフタのチョッキだのを身に着けていた頃のこと――グロスターの町に、一人の仕立屋が住んでいた。

ウエストゲート通りにある小さな店の窓ぎわで、作業台のうえにあぐらをかいて、朝から晩までそこに座っていた。

日のある間じゅう針とはさみを使い、サテンとか、ポンパドールとか、リュートストリングとかいった布を縫い合わせていたのだった。そういう奇妙な名前の織物たちは、この物語の時代、たいへんな高級品だった。



だが、上物の絹をお客のために縫いはしても、この仕立屋本人は、とてもとても貧しかった——眼鏡をかけた小柄な老人で、やつれた顔と老いて曲がった指をして、着ている背広はすり切れていた。

分不相応に豪華な織物たちを、仕立屋は少しも無駄にしないように切ったから、作業台の上に散らばるのは、ひどく小さな端切ればかりだった——「こんなに小さくちゃ何にもならんなあ——せいぜいネズミのチョッキだわい」と、仕立屋は言うのだった。



クリスマスの季節がせまった寒さの厳しいとある日のこと、仕立屋は一着のコートをつくりはじめた――パンジーや薔薇が刺繍された、深紅のうね織りの絹のコートを。それと、クリーム色のサテンのチョッキ――こちらは紗と緑のモール糸で飾りつけられていた――グロスターの市長のための衣装だった。

仕立屋は、独り言をつぶやきながら、働きづめに働いた。絹の寸法をとり、それをくるくる回しながら、型紙どおりにはさみで切りとっていった。作業台の上じゅうに、深紅の端切れが散らかった。

「ゆとりはまるでないわい、斜めに切っても。まったくギリギリだわい。あまりはネズミの肩掛けに、モブキャップのリボンだ！　ネズミのな！」と、グロスターの仕立屋は独りごちた。



降り落ちてきた雪が、鉛枠で小さくくぎられた窓のガラスにくっつき、陽をさえぎるころ、仕立屋はその日の作業をおえた。絹とサテンは残らず切り抜かれ、作業台のうえに並べられた。

コート用が12片、チョッキ用が4片。それにポケットの垂れぶたと、袖口と、ボタンとが、みな整然と並べてある。コートの裏地には上等の黄色いタフタが使われ、チョッキのボタンホールをかがるために深紅の縀り糸が用意されていた。

翌朝縫い合わせる準備は万端ととのって、すべてが正確に採寸され、不足はなかった——ただ、深紅の絹の縀り糸が、ひとかせだけ足りないのをのぞけば。

仕立屋は、日暮れに店を出た。夜寝る家は別にあったのだ。窓を閉め、ドアに鍵をかけると、その鍵を持って出て行った。夜のあいだ、店に住むのは、小さな茶色のねずみたちくらいのものであった。彼らは出入りに鍵など必要としないのだ！



というのも、グロスターじゅうの古い建物の、木でできた羽目板のうしろには、小さなねずみ用の階段や秘密の落とし戸があったからで、ねずみたちは、その長く狭い通路をつかって家から家へ走り回り、表通りに出ることなく町じゅうを行き来することができた。

でも仕立屋は、店の外に出て、雪の中を家まで足を引きずって歩いたのだった。

彼はすぐ近くのカレッジコート小路に住んでいて、玄関はカレッジグリーン庭園の隣にあった。大きくもない家だったのだが、仕立屋はなにしろ貧しかったから、その台所だけを借りていた。

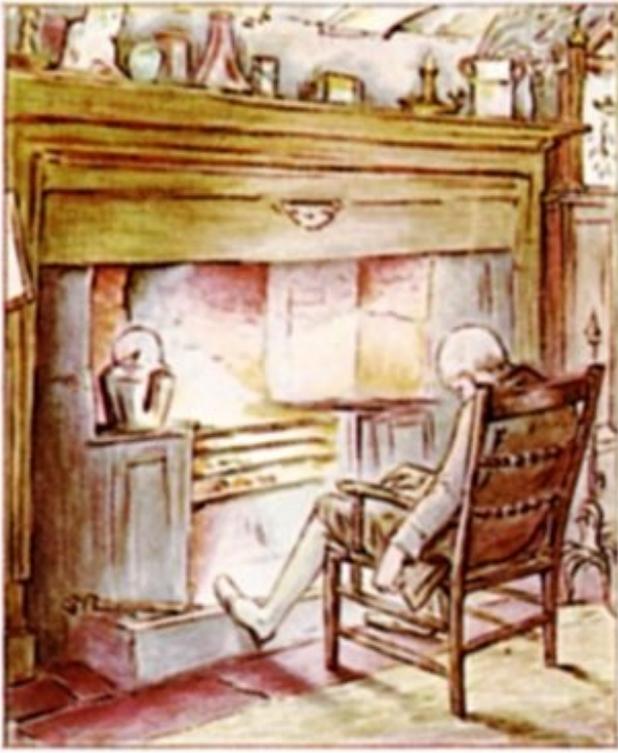
一緒に住んでいるのは、シンプキンという名の猫だけだった。

目下のところ、仕立屋が一日じゅう仕事に出ているあいだ、家の切り盛りはシンプキンにまかされていた。彼もねずみは大好きだったが、コートに使うサテンをくれてやったりはしなかった！



「ニャーオ？」 仕立屋がドアを開けると、猫は鳴いた。「ニャーオ？」

仕立屋は答えて――「シンプキンよ、わしらも一稼ぎできそうだて、だがわしはもうほつれた糸くずみたいにくたくただわい。このグロート銀貨を受け取っとくれ（わしらの最後の4ペンスだ）シンプキン、それと陶器の土瓶を持って、おつかいに行ってくれんか、パンを1ペニー、ミルクを1ペニー、ソーセージを1ペニー。それから、のう、シンプキン、わしらの最後の4ペンスの最後の1ペニーで、深紅の絹糸を買ってきておくれ。その最後のペニーをなくしてはいかんぞ、シンプキン、さもないとわしは落ちぶれはてて紙くずみたいにぼろぼろになってしまうわい。わしにはもう、縫り・糸は・ない・のだからな」



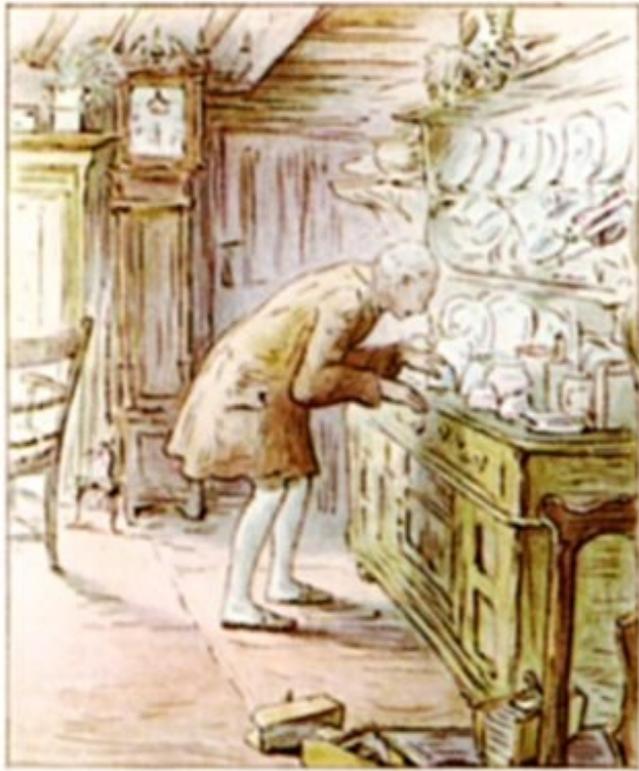
するとシンプキンは再び「ニャーオ？」と鳴き、グロート銀貨と土瓶を持って、暗い表へと出て行った。

疲れすぎて具合が悪くなっていた仕立屋は、暖炉のそばに腰をおろし、例の素晴らしいコートのことを、自分自身に言って聞かせた。

「わしは一儲けするとも――斜めに切って――グロスターの市長がクリスマスの朝にご結婚なさる。それで注文されたコートに刺繍つきのチョッキだ――裏地は黄色いタフタで――タフタはちょうどぴったり、あまりきれなんぞありはしない。ネズミの肩かけにするくらいしか――」

そこで仕立屋は飛びあがった。だしぬけに、彼の独り言を遮って、暖炉の反対側にある食器棚から、小さな物音が続けざまに聞こえてきたのだ――

カタコト、カタコト、カタコトカタン！



「はて、何が起こったやら？」

グロスターの仕立屋は、椅子から跳ねるように立ち上がった。食器棚は瀬戸物や土鍋、柳模様の陶器皿、それにティーカップやジョッキで埋まっている。

仕立屋は台所を横ぎってそっと食器棚のそばに立つと、耳を澄まし、眼鏡越しにしげしげと眺めた。するとまたしても、例のおかしな小さな音が、ティーカップの下から ——
カタコト、カタコト、カタコトカタン！

「こりゃまた奇妙なこった」

グロスターの仕立屋はそう言って、ふせてあったティーカップを持ち上げた。



現れたのは小さな生きたねずみの奥さんで、仕立屋にむかって、膝を曲げて丁寧にお辞儀をした！ そして食器棚からぴよんと飛び降りると、羽目板の下に姿を消したのだった。

仕立屋は、再び暖炉のそばに座り、瘦せた冷たい手をあたためながら、ぼそぼそ独り言を続けた――

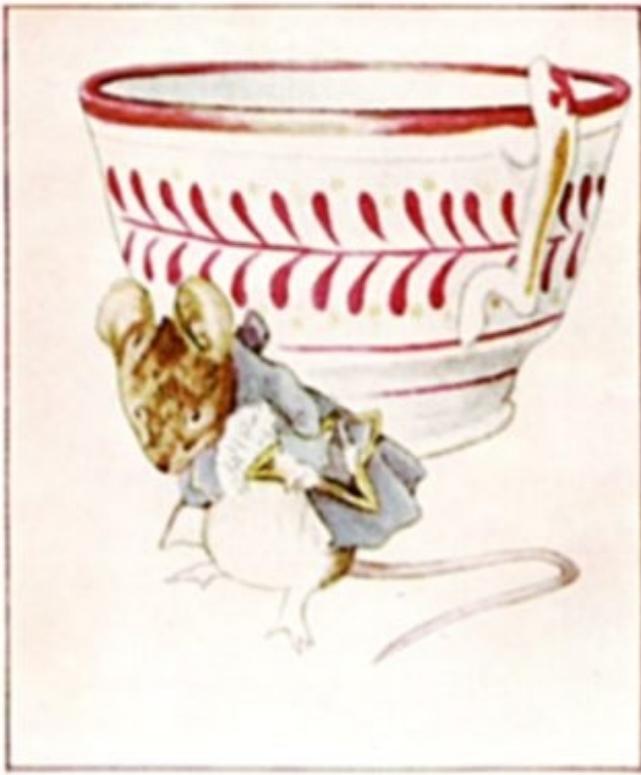
「チョッキは桃色のサテンを切り抜いた――タンバー刺繍と美しい釜糸で刺したばらのつぼみ模様の！ わしは、最後の銀貨をシンプキンに預けてしもうてよかったのか？ 21のボタンホールに深紅の縞り糸が入り用だ！」

ところが突然、食器棚からもう一度小さな物音が――

カタコト、カタコト、カタコトカタン！

「こいつはびっくり仰天だわい！」

グロスターの仕立屋は言い、ふせてあった別のティーカップをひっくり返した。



進み出たのは小さなねずみの紳士で、仕立屋にむかい腰をかがめて礼をした！

それに続いて、食器棚じゅうから、小さなカタコトの合唱がわき起こった。いっさいがっさいが鳴り響き答えあう、それはまるで虫の食った古い鎧戸のなかのシバンムシのようだった――

カタコト、カタコト、カタコトカタン！

そうしてティーカップの下から、深鉢や洗面器の下から、続々と現れ出た小さなねずみたちは、食器棚から飛び降りては、羽目板の下に消えていったのだった。

仕立屋はほとんど火に覆いかぶさるようにして座りこみ、自分のおこないを悔やんだ――
「21のボタンホールを深紅の絹糸で！ 土曜の昼までに終わらせにやならんのだ。そして今は火曜の晩だ。わしは、あのねずみたちを逃がしてしもうてよかったのか、ありや間違いなくシンプキンがつかまえとったのだぞ？ ああ、わしゃおわりなんだ、糸がなくては！」



小さなねずみたちは再び顔を出し、仕立屋の言葉をきいて、その素晴らしいコートの様
に興味をもった。そして互いに、裏地のタフタや、小さなねずみの肩かけについてささや
きあった。

そのうち突然、彼らはそろって羽目板のうしろの通路に逃げ込み、家から家へと互いに鳴
き交わしながら走って行ってしまった。それで、シンプキンがミルク入りの土瓶を手に戻っ
てきた時には、仕立屋の台所には一匹のねずみも残っていなかった！



ドアを開けて飛び込んできたシンプキンは、ご立腹で「グルルミャーオウ！」と、いらだった猫のような声を出した。雪は嫌いだというのに、耳といわず襟首といわず雪まみれだったのだ。彼はパンとソーセージを食器棚の上に置き、それから鼻をふんふんさせてにおいをかいだ。

「シンプキン」 仕立屋がきいた。「わしの糸はどこだ？」

けれどもシンプキンはミルクの土瓶を食器棚に乗せると、じろりとティーカップを見やった。夕飯に、小さな太ったねずみを一匹ご所望だったのだ！

「シンプキン」と仕立屋。「わしの 縫・り・糸はどこだね？」



ところがシンプキンが小さな包みをこっそりティーポットの中に隠してしまい、仕立屋にむかってフウッグルグルと怒りのうなりをあげた。もし口がきけたら、こう言っていただろう――「おれのね・ず・みはどこだね？」

「ああ、わしはもうおしまいだ！」　グロスターの仕立屋はそう嘆くと、うちひしがれてベッドにもぐりこんでしまった。

一晩中、シンプキンは台所じゅうを探しに探しまわった。戸棚をのぞき、羽目板の下をのぞいた。例の縫い糸を隠したティーポットの中までも。それでもねずみは一匹も見当たらなかった！

仕立屋が眠りながらぶつぶつと不明瞭な寝言をつぶやくたびに、シンプキンは「ミャーオグルルシーッ！」と鳴き、猫たちが夜に出すような、あやしく恐ろしげな声をたてていた。



哀れな老いた仕立屋は、ひどい熱を出して寝込んでしまい、四隅に柱のある大きなベッドの中で転々と寝返りをうった。そして、うわごとにまでつぶやいていた——「糸がもうない！ 糸がもうない！」

丸一日、彼は寝込んでいた。明くる日も、そのまた明くる日も。これでは紅色のコートはどうなるのだろう？ ウエストゲート通りの仕立屋の店では、刺繍のついた絹やサテンが切り離されたままテーブルの上にある——20とひとつのボタンホールも手つかずで——いったい誰がそれを縫いに来るといっただろう、窓にはかんぬきがあり、ドアはかたく錠がかかっているというのに？

ところがそんなものは、小さな茶色のねずみたちにとって、何の障害にもならなかった。グロスター中の古い家々のあいだを行き来するのに、どんな鍵をも必要としないのだから！



おもてでは、市場に集まった人々が、雪の中を歩きにくそうにしながら、ガチョウや七面鳥を買い求めたり、クリスマスパイを焼く材料を買って帰ったりしていた。けれども、シンプキンと貧しいグロスターの仕立屋に、クリスマスのごちそうはなかった。

仕立屋は、三日三晩床についていた。そしてクリスマスイブになり、その夜もとっぴり更けてしまった。月が建物の屋根や煙突のうえにのぼり、カレッジコート of 門口を越えて小路を見おろしていた。家々の窓に明かりはなく、何の物音も聞こえなかった。グロスターの町じゅうが、雪の下で深い眠りについていてた。

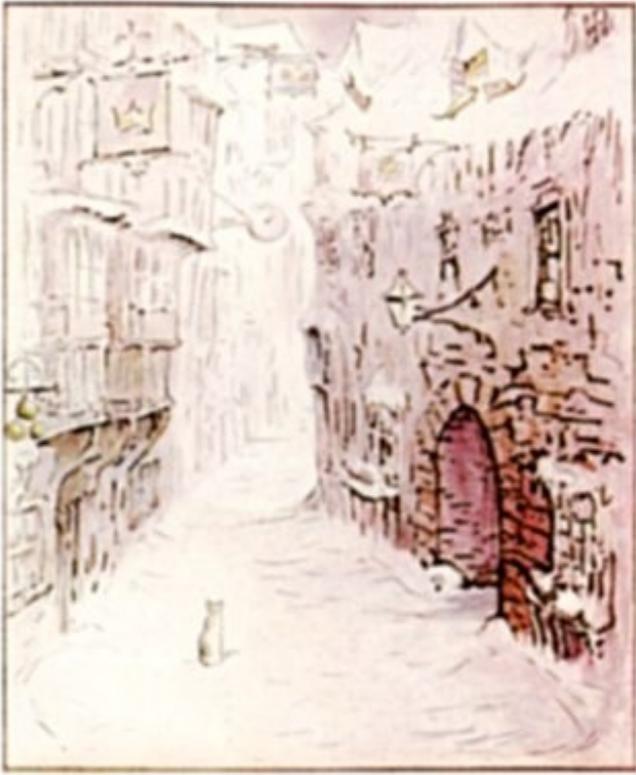
けれどもシンプキンはいまだにねずみをあきらめきれず、四柱式ベッドの脇に立ちあがって、にゃあにゃあ鳴いていた。



ところで古い物語によれば、クリスマスの夜から朝にかけては、すべての獣が言葉を話すことができるという（ただしその言葉を聞いて理解できるのはごくわずかな人々にかぎられている）。

大聖堂の鐘が十二時を打ったそのとき、応えがかえった——その鐘の音の残響のように——シンプキンはそれを聞くと、仕立屋の家のドアを開けて、ふらりと雪の中にさまよい出ていった。

グロスターじゅうのすべての屋根から、切り妻から、古びた木の家々から、古いクリスマスの詩を歌う無数の浮かれさわぐ声がわきあがった——知っているかぎりの古歌はもちろん、知らない歌もいくつか、あのウィットントンを引き留めたボウの鐘のような。



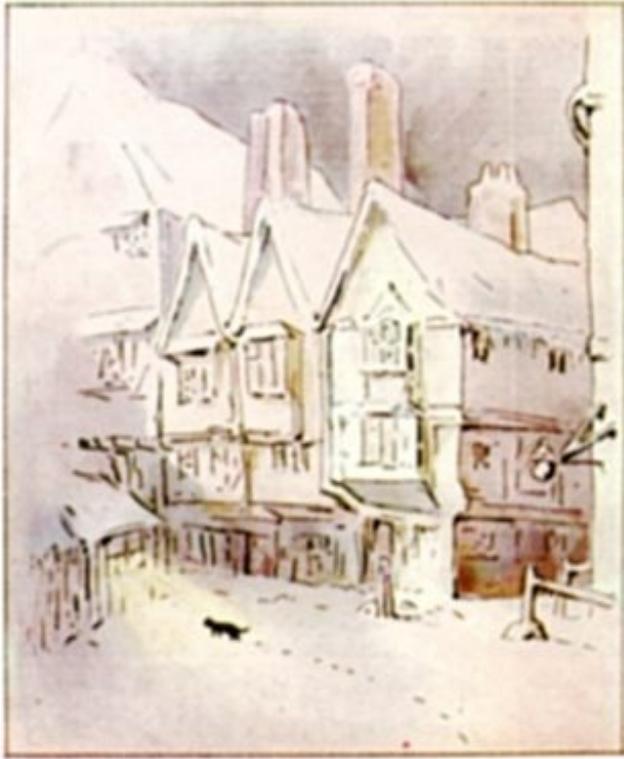
真っ先に、いちばん大きな声で鳴いたのは雄鶏だった —— 「奥さん、起きて、パイ焼いて！」

「へ、ディリ ディリ ディリ だ！」 と、ため息ついてシンプキン。

さて今度は、屋根裏部屋に明かりがつき、ダンスの音が聞こえ、道のむこうから猫たちがやってきた。

「えっさかほいさ ねこにバイオリン、とくら！ グロスターじゅうの猫どもよ—— おれさま以外の」 とシンプキン。

木造の軒下ではムクドリとスズメがクリスマスパイの歌を歌い、コクマルガラスが大聖堂の塔で目を覚まし、真夜中だというのにウタツグミとコマドリが歌いはじめた。あたりは、小さなさえずりの織りなす旋律で満ちあふれた。



しかし哀れな腹ぺこシンプキンには、どれもこれも腹立たしいかぎりだった！

とりわけ苛立たされたのは、木の格子窓の裏側から聞こえてくる、小さなきいきい声だった。おそらくそれはコウモリだったろう。連中はたいていひどく小さい声で――特に黒霜の降る乾いた寒い夜には、グロスターの仕立屋の寝言と同じように、眠りながらしゃべっているのだ。

話しているのは、こんなふうななぞめいたことだった――

「ブン、と言うたはアオバエ。フン、と言うたはミツバチ。

ブンやらフンと鳴くはやつらよ。それとわしらよ！」

シンプキンは、まるでボンネットにハチが入ったような気分で、耳を振り振りそこを離れた。

ウエストゲート通りの仕立屋の店からは、明かりがもれていた。シンプキンがこっそり忍び寄って窓からのぞくと、中はろうそくでいっぱいだった。はさみがチョコキン、糸がパチンと音をたて、そして小さなねずみたちが、声高く陽気に歌っていた――



「20と4人の仕立屋が
でんでんむしをつかまえに、
うちいちばんの男でも
しっぽにさわる度胸がない、
その子が角を突き出す様は
ちっちゃなカイロ雌牛のようさ、
逃げろ、仕立屋、逃げろや逃げろ！
さもなきゃ今に食われるぞ！」

小さなねずみたちは一時も休まずさらに続けて――

「ふるえ 奥様の挽き割り麦を、
ひけ 奥様の小麦粉を、
詰めろ そいつを栗の中、
寝かせておいて一時間 ー」

「ニャア！ ニャア！」 シンプキンは歌をさえぎり、ドアをひっかいた。



けれども鍵は仕立屋の枕の下にあり、中に入ることはできなかった。
ねずみたちは笑っただけで、また別の歌を歌い出した ——

「三匹の小ネズミが座って糸を紡いでいたら、
通りがかりの子猫がのぞいた。
何をしてるの、素敵なおちびさんたち？
紳士の上着を作ってるのさ。
入って、糸を切りましょか？
めっそうもない、子猫さん、切るのは僕らの頭だろ！」

「ニャア！ ニャア！」とシンプキンが叫ぶと、「えっさか、ほいこら？」とねずみたちは応じた ——

「えっさか、ほいこら、すつとんとん！
ロンドンの商人がたは緋色の服のおえらがた
襟は絹糸、裾には金糸
陽気に商船ひきいてござる！」



彼らは指ぬきを鳴らして調子をとったが、どの歌も気に入らないシンプキンは、店の戸口で鼻を鳴らしてにゃあにゃあ鳴いた。

「そしてそれから買ったのさ
どびんとぱちん
つるんにばしゃん、
みんなあわせて1ファージン ——

でもってお勝手の食器棚に乗せた！」と、不作法な小ねずみたちは付け加えた。

「ニャーオ！ 引っ掻いてやる！ 引っ掻いてやる！」

シンプキンは窓枠の上でじたばたと暴れた。一方、中にいた小さなねずみたちは、パッと立ちあがると、さえずるような小さな声を揃えて、一斉にこう叫んだ ——

「縊り糸がもうない！ 縊り糸がもうない！」

そして窓の鎧戸を閉ざし、シンプキンを閉め出した。

それでもまだ鎧戸にあいた穴から、指ぬきを鳴らす音と、小さなねずみたちの声がこう歌うのが聞こえていた ——

「糸がもうない！ 糸がもうない！」



シンプキンは店を離れ、考え込みながら家路についた。戻って見ると、気の毒な年老いた仕立屋は熱が下がり、安らかに眠っていた。

シンプキンは忍び足で移動し、ティーポットから絹糸の小さな包みを取り出して、月あかりの下でじっと見た。そして、あの善良な小さいねずみたちに比べ、自分のおこないの悪さを心から恥じたのだった！

翌朝、目を覚ました仕立屋がパッチワークの上掛けのうえに最初に見たものは、深紅の絹の縫り糸ひとかせ。そしてベッドの脇には、悔い改めたシンプキンが控えていた！



「ああ、わしは糸くずのように疲れきっとる」とグロスターの仕立屋は言った。「だが、縫り糸はある！」

仕立屋が起きあがって着替え、シンプキンに先導されながら表通りに出ていくと、太陽は雪のうえで輝いていた。

ムクドリたちが、組み煙突のうえで鳴き、ウツグミとコマドリが歌っていた——だが、それはいつも通りの鳴き声で、昨夜歌ったような言葉にはなっていなかった。

「ああ」と仕立屋。「わしには縫り糸がある——だが力はずきた——時間もな——ボタンホールをひとつかがるのがやっとだて。何しろもうクリスマスの朝なのだから！ グロスターの市長のご婚礼は正午——なのにお召しになる深紅のコートがどこにある？」



ウエストゲート通りの小さな店のドアを開けると、シンプキンが駆け込んだ、まるで何かを期待する猫のように。

だがそこには誰もいなかった！ 小さな茶色のねずみ一匹すら！

作業台はきれいに掃除されており、小さな糸くずや絹の切れ端などはすべて片付けられ、床からも残らず持ち去られていた。

けれども台の上には —— おおなんてこった！ と仕立屋は叫んだ—— そこには、切り抜いただけの絹を残していったその場所には —— これまでのどのグロスター市長がお召しになったどんな衣装も及ばぬほど、このうえなく美しいコートと、刺繍のついたサテンのチョッキが置かれていたのだ！



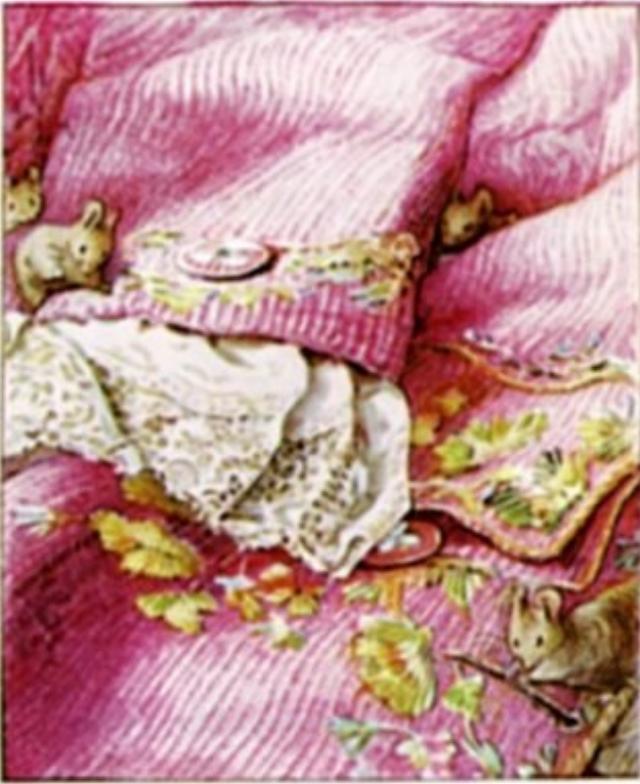
コートの上にはバラとパンジーが、チョッキにはケシとヤグルマソウが刺繍されていた。

ほとんどすべて仕上がっているなかで、深紅のボタンホールがひとつだけかがられていなかった。そして、その未完成のボタンホールのところに、こんな言葉が書かれた紙切れが留められていた—— とてもとてもちっぽけな文字で ——

いとがもうない

さてそれからだ、グロスターの仕立屋がツキに恵まれたしたのは。たいそう恰幅がよくなり、経済的にもゆたかになった。

彼はグロスターじゅうの裕福な商人たちに、そして近在のりっぱな紳士がたのために、たいへん素晴らしいチョッキをいくつも縫いあげたのだった。



これほど見事なフリルや、刺繍つきのカフスや襟飾りを、いままで誰も目にしたことがなかった！ けれど何にもまして名声を博したのは、彼がかがるボタンホールだった。

そのボタンホールの縫い目は、いかにも端正で——如何にも端正で——しなびて曲がった指に指ぬきをはめ、眼鏡をかけた老人が、どうやったら縫うことができるのか不思議なほどだった。

そのボタンホールの縫い目ときたら、いかにも小さく——如何にも小さくて——それはまるで、小さなねずみが縫ったかのように見えたのだ！

おしまい

※p.1：フリーダ

ポターの家庭教師の娘で当時10才の女の子。病床のこの子にあてて書いた手紙が、この物語の原型。

※p.6：カレッジコート通り・カレッジグリーン庭園

大文字なので地名でしょうが、どんなものかよくわからなかったので適当に解釈しました。College Courtは通りの名前だと思いますが、College Greenはグリーンだから庭だろうというくらいの発想です。

※p.11：シバンムシ（英名death-watch beetle）

原文にdeathはありませんが、おそらくこれのことだと思います。頭部を家屋の建材の柱などに打ち付けてカチカチ音を立てるが、これを死の秒読みの時計の音とする迷信が名前の由来。

※p.17：ウィットintonのボウの鐘

ディック・ウィットintonは、ロンドン市長に4度選ばれた実在の人物。若い頃、奉公のつらさに耐えかねて、猫を連れてロンドンを去ろうとした時、ボウの鐘の音に呼び止められたという伝説がある。

※p.17：「奥さん～」 「ディリディリ～」 「えっさか～」

マザーグースを踏まえているようなので、講談社文庫の谷川俊太郎訳マザー・グース1巻と4巻から引用させて頂きました。

ポター作品リスト

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[リスのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggy-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【パイとパイ皿の話 : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906) 【ジェレミー・フィッシャー氏の話】
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎの物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907)
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)
【サミュエル・ウィスカーズの話 あるいは、うずまきプディング : 執筆中
】
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシー一家の話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】 **NEW**
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913)
20. Appley Daply's Nursery Rhymes (1917) 【[アプリィ・ダプリィの童謡](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの童謡](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930)

原文参照 [Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

グロスターの仕立屋

<http://p.booklog.jp/book/48779>

作者：ピアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48779>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48779>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.